

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 **東洋音楽学会** **会報** 第53号

発行(社)東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号
TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

目次

第32回通常総会のお知らせ.....1	定例研究会報告.....2
第52回大会のご案内.....1	会員異動.....9
会費納入のお願い.....1	図書・資料等の受贈.....9
『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ.....2	新刊書籍.....9
ホームページアドレス変更のお知らせ.....2	新発売視聴覚資料.....10
定例研究会開催予定.....2	前号の訂正とお詫び.....10
定例研究会発表募集.....2	編集後記.....10

第32回通常総会のお知らせ

第32回通常総会招集状

2001年8月9日

社団法人 東洋音楽学会会員各位

社団法人 東洋音楽学会
会長 柘植 元一

社団法人 東洋音楽学会会員定款第23条及び第26条の定めに基づき、第32回通常総会を下記の通り開催いたしますので、正会員は、ご出席ください。

記

日時 平成13(2001)年11月24日(土)16時20分~18時
場所 沖縄県立芸術大学奏楽堂

審議事項

- 第一号議案 2000年度事業報告の件
- 第二号議案 2000年度収支決算の件
- 第三号議案 2001年8月31日現在貸借対照表・財産目録の件
- 第四号議案 2001年8月31日現在会員異動状況の件
- 第五号議案 2001年度事業計画の件
- 第六号議案 2001年度収支予算の件
- 第七号議案 制度等改革案の件
- 第八号議案 その他

- ・同封の返信はがきにより、出欠を 10月23日(火)までにお知らせください。
- ・総会欠席の方は、委任状欄に必ずご署名、ご捺印ください。
- ・上記以外の議案を提出なさりたい方は、あらかじめご連絡ください。

第52回大会のご案内

(社)東洋音楽学会第52回大会を、同封の日程の通り開催いたします。どうぞ多数ご参加ください。大会プログラム冊子は10月初めに発送いたします。

なおご案内のごとく、11月23、24、25日には第4回中日音楽比較研究国際学術会議が同時開催されており(一部共催)同研究発表会へも参加ができます。

出欠の回答

同封の出欠回答はがきの各欄に漏れなくご記入の上、出欠のいかにかわらず、10月23日(火)必着でご返送ください。なお総会欠席の方は、必ず委任状欄にご記入ご捺印ください。

大会参加費・懇親会費・昼食代の納入

会場受付の混乱を避けるため、同封の振替用紙にて、10月23日(火)までにご送金ください。やむをえず、24日以降に送金なさった方は「払い込み受領書」を受付に提示してください。なお、払い込む金額は下記の通りです。

大会参加費 3000円 学生会員は2000円
懇親会費 5000円 学生会員は3000円
二日目、三日目昼食代 各1000円

プログラム

当日会場ではプログラムの再配布はいたしません。後日送付する冊子を忘れずにご持参ください。

会費納入のお願い

9月1日より本学会の2001年度(2001年9月1日~2002年8月31日)に入りました。新年度会費の納入をお願いいたします。会費請求書と振替用紙を同封いたしましたので、未納金額をお確かめのうえ、早速払いこみください。振替用紙の住所・氏名欄には記載漏れのないようご注意ください。会費滞納がありますと、機関誌を

お送りできません。

なお、本紙と行き違いに納入がありました場合は、どうぞご容赦ください。

『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ

学会機関誌『東洋音楽研究』第67号(2002年8月発行予定)の原稿を募集します。原稿の種別、執筆要領などについては、最新号(第66号)の巻末に掲載した「投稿規定」をご参照ください。

原稿送付先: 〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
東京芸術大学音楽学部小泉文夫記念資料室気付
東洋音楽学会機関誌編集委員会あて

締め切り: 2001年12月20日(木)

(機関誌編集委員会)

ホームページアドレス変更のお知らせ

すでに学会ホームページや例会通知はがきでお知らせしているように、学会ホームページのURLが変更されました。ホストの国立情報学研究所のドメイン名変更によるものです。なお旧URLは、11月1日以降使用できなくなります。

新URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/>

旧URL: <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/tog/>

定例研究会開催予定

本部

第442回定例研究会

2001年10月13日(土)午後2時-4時30分

東京芸術大学音楽学部

1. 「室町時代宮中御懺法講の背景について」(仮題)
三島暁子(武蔵大学大学院)

2. 未定

第443回定例研究会

2001年12月8日(土)午後2時-5時

(第69回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会合同例会)

お茶の水女子大学

内容未定

第444回定例研究会

2002年2月2日(土)午後2時-4時30分

上野学園日本音楽資料室

内容未定

関西支部

第205回定例研究会

2001年9月29日(土)午後2時-5時30分

京都市立芸術大学 大学会館交流室

<ロシア音楽研究の現在>

1. ロシア先住民族芸能の伝承と調査研究の現状
谷本一之(北海道立アイヌ民族文化研究センター)
 2. 最近のチャイコフスキイ研究とムソルグスキイ研究の間
森田稔(宮城教育大学)
- 司会 龍村あや子(京都市立芸術大学)

沖縄支部

第33回定例研究会

2002年3月16日(土)午後1時30分~3時30分

沖縄県立芸術大学奏楽堂講義室

修士論文発表会

定例研究会発表募集

下記の定例研究会における研究発表(口頭)を募集します。発表希望者は、発表種別(研究発表、報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望日、氏名、所属機関、職名、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail等)を明記の上、学会事務局宛申し込んでください。

第442回定例研究会

2001年10月13日(土)午後2時-4時30分

東京芸術大学音楽学部

第444回定例研究会

2002年2月2日(土)午後2時-4時30分

上野学園日本音楽資料室

定例研究会報告

第438回東洋音楽学会定例研究会(2001年4月7日)

東京芸術大学音楽学部5-301教室

2000年度卒業論文発表(その2)

1. シタールのガラナーについて

新井剛(大東文化大学)

(発表要旨)

ヒンドウスターニー音楽(北インド古典音楽)には声楽・器楽・舞踊などのジャンルごとにガラナーと呼ばれる「流派」が存在する。本論文では、北インドの代表的な楽器のひとつであるシタールのガラナーをとりあげた。18世紀後半から19世紀中葉にかけて、現在演奏されるような器楽の様式が成立すると同時に、シタールのガラナーも形成された。音楽家はしばしば、アイデンティティの位置づけをガラナーに求めている。ガラナーの権威の源泉として、言及されるのは北インド古典音楽の最高権威、楽聖ターンセーンの家系「セーニヤー」との関係である。音楽家の師や師の祖先がセーニヤーの弟子であったこと、特に、ドゥルパドと呼ばれる声楽様式を習ったことが権威の源泉となるのである。

1950年代以降、世界的にインド音楽を普及させるのに貢献したラヴィ・シャンカル(1920-)をはじめとする世代の音楽家はガラナーの様式の違いや格式などを重要視していたが、今日の若い世代の音楽家はガラナーをそれほど意識してはいない。彼らは複数の音楽家に師事するのが普通であり、他のガラナーの様式も自由に取り入れる。

20世紀以降の音楽学校の設立、それに伴う伝統的師弟制度の崩壊、さまざまなメディアの普及など、音楽家を取り巻く社会状況の変化の中、ガラナーの実体や重要性はなくなりつつある。

2. 宮城県中新田町の虎舞をめぐる

尾形晶子(国立音楽大学)

(発表要旨)

虎舞は形態と囃子が獅子舞に類似している。よって、獅子舞に付随したものと、といったイメージを持ち合わせるが本当にそう言えるのか。全国の虎舞の起源を調査した結果、虎舞は、古の人々が虎の霊力、呪力に注目して、純粋に「虎舞」として成立した芸能であり、獅子舞の倣いであるとは必ずしも言えないことが明らかになった。

今回の調査で、全国には少なくとも57の虎舞がある。成立年代は古いものでは鎌倉時代、南北朝時代のものがあるが、多くは近松門左衛門の「国性爺合戦」の影響を受け、江戸時代中期から後期にかけて成立した。

宮城県中新田町にある「火伏せの虎舞」は、明治期の大火で当時の文献が消失してしまったため、起源については正確なことを知ることはできず、一般には、660年前に始まったと伝えられている。しかし今回、囃子「岡崎」を検証すると、囃子がつけられたのは江戸時代以降であることが導き出され、現在行われているような舞が660年前からあったという事実は疑わしいものとなった。また、「岡崎」と呼ばれる囃子は中新田の虎舞だけでなく、全国各地の神楽や獅子舞の囃子にもある。曲調はどれも類似しており、愛知県岡崎市で江戸時代に流行した「岡崎女郎歌」に端を発するものであることが明らかになった。

虎舞を担う人々との接触を通じ、人と人のズレについて考えさせられた。時代背景の違いゆえに、中高年者層と若年者層とは異なった意識と価値観がある。しかし両層に共通して言えるのは、他者との関わりの中で自己は存在し得ないということである。他者との関わりなしでは自己が自己として実感されることは難しい。しかしそこで、郷土芸能の場が自己を知る機会の一端を担えるのではないか。そうした郷土芸能の今日的な意義を主張したい。

3. 現代都市の祭りにおける音楽の役割について

- 高円寺阿波おどりの例を中心に -
 讃井悠季(桐朋学園大学)

(発表要旨)

[1]前提と問題提起

音楽が社会において実際に機能を果たしているということがありうるのかどうか、という疑問から、音楽が社会において機能する様子を考察したいと考え、「現代社会における祭り」という場(本論文の場合「高円寺阿波おどり」)を設定し、その中で芸能とそれが持つ音楽的要素がいかに機能するのかを考察した。具体的には伝統的なあり方とは別に「徳島県特有の民衆芸能 全国に普遍的な民衆芸能」という脈絡の変容を経た阿波踊りのあり方の成因として、阿波踊りという芸能そのものがもつ特性と機能 現代都市の祭りのあり方と阿波踊りの関連という2点が関与している、と仮定した。

[2]阿波踊りという芸能の特性と機能

主にフィールドワークの結果から、阿波踊りという芸能の特性(臨機応変な機動性 場所への親和性の高さ、場所性からの解放 非日常的な空間への臨場感をかきたてるという鳴物の性質と機能)機能(阿波踊りの空間形成能力)を導き出した。

[3]具体例における検証(祭りの成立と阿波踊りという芸能)

[2]を受けて具体例における検証として、高円寺阿波

おどりの特徴(高円寺独特の空間性「みる」側-観客と「する」側-踊り手・演奏者の双方向)を考察した。その結果高円寺阿波おどりが祭りとして成立したことに、阿波踊りという芸能自体の特性が深く関係していることがわかった。

[4]結論

阿波踊りという芸能は「現代都市で行なわれる祭り」の場自体を形成するという機能を持つ(高円寺での検証)。そして現代都市で行なわれる祭りのあり方と阿波踊りという芸能の性質とは関連していると言える。このような「現代都市の祭り」で踊られる阿波踊りは音楽と社会の関わりを示す一例として重要なものであると考える。

4. 1896年度版『基督教讃美歌』の成立とその背景

浅井佑子(国立音楽大学)

(発表要旨)

本論文は、明治期に欧米のプロテスタント教会の宣教師によって導入された讃美歌を取り上げ、それがいかに讃美歌集として編纂されていったのかを論じたものである。讃美歌集は、1896年(明治29)に、横浜を中心に活動したバプテスト(浸礼)派から出版された『基督教讃美歌』を取り上げた。本讃美歌集は、バプテスト派から出版された5種の歌集のうち、一番最後のものであり、353篇の讃美歌を収録した最も規模の大きいものである。いわば、同派の集大成といえる本讃美歌集は、既刊の4種の讃美歌集『聖書之抄書(せいしよのぬきがき)』『宇太登不止(うたとふし)』『宇太乃不美(うたのふみ)』『基督教讃美歌』とは異なる傾向が見られるのである。

『基督教讃美歌』において特徴的な点は、バプテスト派特有の大衆宣教という理念が讃美歌集編纂において、特に口語歌詞と仮名表記において一貫して反映されている事である。更に検証の結果、歌集に収録されている讃美歌の多くが新規に導入されたものであり、その大半が「福音唱歌(gospel song)」に属するものだったのである。この事は、19世紀後半のアメリカの母教派における福音唱歌の興隆が、本讃美歌集の編纂に影響していた事を明白に裏付けている。概して福音唱歌は、率直な言葉で神が我々に与える愛の証しを伝え、それが慣れ親しみやすい旋律によって支えられている。こうした特徴が、大衆を基本としたバプテスト派の宣教の理念に適っていたと思われる。

この研究を通じて、讃美歌集編纂が、教派の特色に加え、時代の傾向を反映したものである事を明らかにする事ができた。

5. 『箏曲集』についての研究

五線譜の諸問題を中心にして
 根津智美(お茶の水女子大学)

(発表要旨)

[1]本論文は、音楽取調掛によって編集された、「日本で初めての印刷された邦楽の五線譜」(吉川英史; 蒲生郷昭1989「音楽教育【日本音楽の教育】」、平野健次他(監修)『日本音楽大事典』、東京:平凡社、p.209)と言われている『箏曲集』を取り上げて、その五線譜化の諸問題を中心に、『箏曲集』が含んでいる要素、機能を明らかにすることを目的とする。

[2]研究対象は、『箏曲集』編集に関する諸資料と、『箏

曲集』(明治21)の二つである。

[3]研究方法は、史料研究と、『箏曲集』と原曲楽譜との表記法の比較研究の二通りで行った。

[4]研究結果

音楽取調掛の方針は、『箏曲集』編集の際に、箏曲と西洋音楽の両要素を併用し、五線譜で書かれた『箏曲集』を“教材”として使用する、というものである(すなわち、『箏曲集』利用の前提となり、核となるのは西洋音楽理論である)。

一方、『箏曲集』の内容には、箏曲固有の性質を保っている要素も認められるが、五線譜化によって、その性質を十分に表現しきれていない要素もある(これは、「初編箏曲集解説書」において、補うことのできた点であろう)。

[5]結論

『箏曲集』は、核となる西洋音楽理論、薄い箏曲固有の性質、視覚的な五線譜という三重構造で成り立っていると考えられる。すなわち、音楽取調掛の方針よりも箏曲の要素が薄く、西洋音楽理論の要素が濃い楽譜である、といえよう。またこの五線譜による『箏曲集』は、内容的には箏曲のことを扱ってはいるが、西洋音楽理論を理解して初めて機能する、西洋音楽理論に基づいた楽譜である、ということも言える。

2000年度修士論文発表 (その2)

1. ソンの形成と発展 キューバ大衆音楽における トランスカルチャーレーション 二田綾子(東京芸術大学)

(発表要旨)

キューバでは、アフリカとヨーロッパ(特にスペイン)を主軸とした多様な文化の混交により独特な混血文化を生み出しているが、その変容を最も顕著に反映して形成された音楽がソンである。十九世紀後半、スペインからの独立に前後してクバニア=キューバ性という概念が芽生え、多くの新しい文化が生まれたが、そのような複雑な文化間での相互関係の過程の局面を表現するのに、フェルナンド・オルティスは「トランスカルチャーレーション」という用語を生み出した。その中でもソンはトランスカルチャーレーションの発展の段階を表明する象徴的存在であるということから、単なる一つの音楽様式というよりも、それ以上の意義を持っていると考えられる。

ソンを論文のテーマとして取り上げた理由として、ソンはキューバの混血化の歴史を最も顕著に表出しているという点、社会階級や人種、世代の境界を越え、あらゆる国民から受け入れられた音楽であるという点、音楽形式、リズム、楽器編成などにおいても文化の融合を代表する音楽であるという点などが挙げられる。

論文ではソンが形成された時代の前後におけるキューバの社会的状況や歴史的な変化という観点と、音楽的な観点の双方から浮かび上がるクバニアに関して探求した。以上の研究によって、ソンはトランスカルチャーレーションの過程の中で時代の変化に応じて柔軟に変容し続けているため、常に国民音楽として中心的役割を担っており、クバニアの象徴であることが明らかになった。

2. 七弦琴譜『碣石調幽蘭第五』及び指法書『琴用指法』研究 - 中国亡佚琴譜の日本における受容と近代中国への伝播について - 小野美紀子(お茶の水女子大学)

(発表要旨)

『碣石調幽蘭第五』は、日本に伝存する最古の七弦琴(琴/古琴。中国の撥弦楽器の一種。)譜で、江戸時代、指法書『琴用指法』と共に後水尾天皇から楽家の狛家に下賜された後、荻生徂徠によって見出された。本論文は音楽文献史学の見地から、『碣石調幽蘭第五』と『琴用指法』の日本における受容と近代中国への伝播の一端を考察することを目的とし、文献史料からの調査を通して以下の四つの問題について解明を行った。

[1] 『碣石調幽蘭第五』に関する解説譜の類である諸写本の内容と系統について: 三つの系統、A. 荻生徂徠著『幽蘭譜』、B. 『幽蘭譜抄』、C. 荻生観校正『幽蘭譜』が確認できた。Aは徂徠の著であるとほぼ確定し、Bは徂徠著『琴学大意抄』で挙げている「幽蘭譜ノ抄」を指し、同じく徂徠の作である可能性が高いと推察した。

[2] 『琴用指法』原本の現在の所在について: 原本の紙背に書かれていたという笛の譜「秋風楽」に関する文献記載に着目し、現在彦根城博物館所蔵の『琴用指法』(目録名『琴用指法』)が、不明とされている原本に当たる可能性が高いことを推定した。

[3] 『碣石調幽蘭第五』原本の江戸末から明治初期における伝存過程について: 原本が天保13年(1842)、京都医学院別家の医者で古物家の畑柳平の手にあったこと、『碣石調幽蘭第五』が初めて中国で紹介される起点となったのが、畑柳平原本所蔵時であったことを確認した。また文献記載から、畑家京都医学院と琴楽との接点が窺えた。

[4] 日本から中国に伝えられた指法書『烏絲欄指法譜』の内容と系統、及び中国に渡った経緯について: 中国で1950年代頃から『碣石調幽蘭第五』の解読研究、演奏等に大いに用いられてきた指法書『烏絲欄指法譜』は、明治期、楊守敬(清国の駐日公使随員)が日本から持ち帰った、前半の幽蘭譜の部分のみ欠いた荻生徂徠著『幽蘭譜』(タイプA)の写しであると推察できた。

3. 明治時代の歌舞伎陰囃子

五代目尾上菊五郎の散切物を中心に
土田牧子(東京芸術大学)

(発表要旨)

論文では、明治時代の歌舞伎が大きく変化したことを踏まえ、その時代に作られた作品の中で陰囃子がどのように工夫されているのか、五代目尾上菊五郎が積極的に演じた散切物の陰囃子を中心に考察した。杵屋栄二旧蔵の附帳(国立劇場所蔵)、六合新三郎旧蔵の附帳と富士田音蔵旧蔵の附帳(以上早大演博所蔵)の三種類のコレクションから、論文の目的に適切と思われる『島衛月白浪』、『水天宮利生深川』、『月梅薫籠夜』の三つの散切物と、その比較対象として世話物の『新皿屋敷月雨』と活歴史物の『那智瀧祈誓文覚』の附帳を選び、主な資料とした。論文では五作品の陰囃子について細かく検討した後、三つのジャンルの比較を行ったが、発表では『水天宮』の陰囃子を中心に取り上げた。

『水天宮』の幸兵衛内の場では、清元の余所事浄瑠璃とト書き浄瑠璃を交互に演奏する手法が使われていた。どちらも河竹黙阿弥の作品では以前から使われていた演出だが、清元と義太夫を一つの場面で一緒に演奏するという工夫は新しいものである。従来物を活かしつつ斬新さを目指すという姿勢は他の散切物でも見られ、特に

汽笛の音などそれまでにはなかった音を表現する場合にもともとあった楽器を利用して新しい音を作るという例はいくつも見ることが出来た。また、『水天宮』の後半では、異なった陰囃子を次々に用いて物語のクライマックスをより劇的に描いているという特徴があり、それは他の三つの散切物でも共通していた。それを世話物、活歴史物と比べると、世話物では同様の特徴が見られるのに対し、活歴史物では逆に役者の見せ場では音楽は少なくとも役者のセリフや演技を際立たせる方法を取っていた。散切物の陰囃子は、全く新しい手法を目指した活歴史物とは異なり、大きな枠組みとしては元来の歌舞伎的な手法を用い、それに少し工夫を加えるという方法で斬新さを目指した、ということが出来る。

4. 江戸前期における一噌流唱歌付の研究

森田都紀 (東京芸術大学)

(発表要旨)

本稿は、江戸前期の一噌流唱歌付から音楽内容を明らかにし、唱歌に音楽的解釈を加えることを目的とする。

資料には、江戸前期成立の早稲田大学演劇博物館蔵『一噌流笛秘伝書』『一噌流笛唱歌付』『能管之譜』の三冊と、現行の『一噌流唱歌集』『一噌流笛指附集』の二冊、計五冊を使用する。中心資料には『一噌流笛秘伝書』『一噌流笛唱歌付』を据え、他は比較・参考資料とする。そして記譜体系に関する考察によって唱歌付の音楽内容を明らかにし、さらに、唱歌の変遷を追うことを通して、唱歌に音楽的解釈を加えた。その際、『一噌流笛秘伝書』は室町末期の唱歌付本文と元禄十七年の加筆部分、『一噌流笛唱歌付』は万治三年の唱歌付本文と宝永二年の加筆部分から読み取った。発表では、唱歌の変遷と音楽的解釈に絞ってお話したい。

発表では初めに、「六之下」を例に取り上げ、旋律型の変遷について述べる。そして次に旋律型を構成する部分部分の意味を持たない文字群を文字列と呼び、この文字列の変遷に見る唱歌の文字上の法則についても述べる。

まず旋律型の変遷においては、同一の旋律型の場合、現行に至るまでその旋律型を特徴づけてきた、核となる音楽内容があることが指摘できる。その部分とは、例に挙げた「六之下」の場合はフレーズの形であったが、他に、吹き方の技法や、唱歌の文字そのものであることが分かった。従って、唱歌が定まっていく過程とは、その旋律型の核となる音楽内容の表現方法を巡る変遷と考える。

また一群の文字列の変遷においては、時代が後になるにつれ唱歌の文字が確定し、種類が少なくなったこと、そして同一内容の文字列の確定する過程とは、音の高低を巡る唱歌の母音の変化と、ゴマ点という記譜法の導入による音価を巡る変化とによる所が大きいのが指摘できる。つまり、音の高低と音価というフレーズの二大要素に対し、より合理的な表現と表記法を求めての変遷であったと言える。

(コメント)

本例会は、会場の約八割を埋めるほどの大入りであったが、研究発表後の質疑応答は必ずしも活発に行われたとは言えない。今回は卒論・修論のテーマが多岐にわたり、多くの異なる分野の研究者の興味をそそるもので

あったが、一方参加者が多かったため、かえって互いに質問を遠慮し合ったという面があったのかも知れない。しかし、研究内容の水準は例年の卒論・修論の発表にひけを取るものでは決してなく、とくに卒論は、水準が低下しつつある今日の日本の大学の状況を考えると、全体的にかなり内容のしっかりしたものが多かった。以下、主だった質疑応答を記すことにする。

新井氏の発表に関しては、ガーナーの研究は重要でありながら、これまでほとんど行われてこなかったという井上氏の指摘が本研究の意義を一層明確にした。尾形氏の発表に関しては、パッハホールでも知られる中新田町の町民の間に、西洋音楽と民俗音楽に対する意識の違いは見られるのかという永原氏の質問に対して、町民は西洋音楽も土地の音楽と同じレベルで捉えているとの説明があった。讃井氏は、大津山氏に札幌のよさこい踊りとの共通点・相違点を問われて、両者にはPAの使用・不使用による相違があり、PAを使用しない阿波踊りの方がその分自由度が高いということも明らかにした。また浅井氏は、地域による賛美歌の伝承の相違はあるのかとの浅野氏の質問に、バプテスト派に限って言えば、一種類の賛美歌集が流布したので、地域差はないと返答した。根津氏の発表に関しては、五線譜化には西洋音楽理論が核となったとあるが、それは当然ではないのかと筆者が正したのに対して、五線譜化には限界があるので、その限界にどう対処するかというところに異なる理論を適用する可能性が出てくる、との説明であった。

二田氏の発表に関しては、ソンの変化をトランスカルチュレーションという特定の概念で捉えようとする根拠を筆者は正したが、それに関しては今後の課題とするとの二田氏の返答であった。小野氏の発表はきわめて緻密ですぐれた研究と筆者には思われたが、残念ながら、ほとんど質問はなかった。土田氏は筆者の質問にこたえて、明治時代の陰囃子の特徴を今までのものを使いながら、それを応用して汽笛など、新しい音の斬新さを創り出す姿勢だと指摘した。また森田氏は、大津山氏の質問に答える形で、記譜法が変わることによって、演奏も変化していったという重要な点を付け加えた。

概して修士論文に対する質問が少なかったのが、やや残念であった。(塚田健一)

第 439 回東洋音楽学会定例研究会 (2001 年 5 月 12 日)
(第 68 回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会合同例会)

お茶の水女子大学理学部 3 号館 701 号室
シンポジウム「音楽図像学の可能性」

報告

「IAML における RIDIM (国際音楽図像資料目録)」

関根敏子 (音楽文献目録委員会)

(報告要旨)

今年設立 50 周年を迎えた IAML (国際音楽資料情報協会 International Association of Musical Library の略称) は、国際音楽学会と連携して音楽資料を統一的に扱う国際機関として設立され、1951 年に UNESCO の支援によりパリ総会で正式に発足した。設立の目的は、音楽および音楽資料を取り扱う諸機関の活動と調査研究を支援し、情報の普及を推進することにある。支部は、日本支部も含めて現在 22 ケ国。国際会議の開催地は毎回異なっ

ており、日本で開催されたこともある。昨年8月のエジンバラでの会議には28ヶ国約400名が参加した(会議については、2000年10月14日の日本音楽学会関東支部第287回定例研究会にて報告、要旨は関東支部通信第55号)。

RidIMは、Rプロジェクトと呼ばれる4つの国際的な企画のひとつである - - RISM(国際音楽資料目録 Répertoire International des Sources Musicales)、RILM(国際音楽文献目録 Répertoire International de Littérature Musicale)、RidIM(国際音楽画像資料目録 Répertoire International d'Iconographie Musicale)、RIPM(国際音楽関係印刷資料目録 Répertoire International de la Presse Musicale)。

発表者は、そのひとつ音楽文献目録委員会(RILM日本支部)の事務局長として1991年から毎年、それ以前にも個人的に2度ほど国際会議に参加、その都度つねにRidIM セクションにも出席してきた。今回は、実際にRidIM の変遷を見聞きした体験をもとに、その現状について発表する。

RidIMは、RILMと同じく1971年、B.S. ブルック他2名によって、RILMとRISMに続くコンピュータによる国際資料目録をめざして設立された(本部ニューヨーク)。「RidIM Newsletter」(1975-97)やその後継誌「Music in Art」(1998-)を発行、さらに「Imago Musicae」(1984-、T. ゼーバス他編集)等の刊行を後援している。

1997年、ブルックが死去する直前のジュネーブ会議で新しい動きが始まる。ヨーロッパの人々が、多くの画像資料はヨーロッパにあるからと本部の移動を提案し、かなり強硬な対立姿勢を示したのである。その動きを反映してか、『ニューグローブ音楽事典(第2版)』(2001)では、「Iconography of music」の項目執筆者がH. M. ブラウンからゼーバスに代わり、内容も大幅に変化した上、RidIMについては、一言も触れていない。一方「RidIM」の項は、ブルックが執筆した文章に、アメリカ・RidIMセンターのZ. プラゼコヴィチが補記。新しい記述部分には主要な各国支部の紹介が大幅に追加されている。

しかし2000年のエジンバラ国際会議では、各国での目録化方式の相違に重点が移っていた。8月8日に「RidIMの歴史と成果」と題してフランス、アメリカ、イタリア、ドイツの代表が、11日には「RidIMの再編成」と題してC. マシップ(現RILM委員長)、P. ヴェリエ、T. ヘック、V. ハインツが発表した。論点をまとめると、アメリカ、フランス、イタリアにはそれぞれ長い活動歴があり、すでに存在するコレクションや独自の整理法を国際的に統合するのは難しいように思われる。また、ウェブ上でのデータベースに関しても、図書館や美術館などのコレクション呈示や著作権など解決すべき問題点は多い。にもかかわらず、RidIMのような国際的活動が重要であることは衆目の一致するところである。

RidIMの資料は、現時点では西洋音楽関係が中心であるが、将来的には日本音楽関係画像資料も重要な位置を占めることになるであろう。その意味でも、日本にも活動センターが設置され、国際的プロジェクトも視野に入れた活動が望ましい。なお、2001年にフランスのペリグーで開催される国際会議では、シンポジウム「フランスにおける音楽画像学センター：現在と未来」などが予定されている。

報告

「江戸期洋楽画像資料、およびその問題点」

笠原潔(放送大学)

(報告要旨)

音楽史研究の上で、画像資料の活用は大いに有効である。そのことは、文化十四(1817)年に来日したプロムホフ夫人がピアノを演奏している様子を描いた絵(伊藤空之允家資料)や文化元(1804)年に来日したロシアのレザーノフ使節団の乗組員が持参した楽器を描いた図(大田南畝、「羅父風説」)が、文字記録には記されていない史実を明らかにし、あるいは文字記録では不明確な事実を一目瞭然に示してくれることから明らかである。

江戸時代の日本に導入された西洋音楽・西洋音楽情報に関する画像資料としては、長崎出島での洋楽挙行の様子を描いた絵図・絵巻・長崎版画(ただし、最後のものが史実をどの程度忠実に再現しているかは不明である)輸入西洋画の模写、漂流記への添付図、幕末に渡来した西洋人たちの奏楽の様子を伝える図(「横浜浮世絵」を含む)などが挙げられる。

問題は、我々は書籍・画集・展覧会の図録といった公刊資料を通じてしかほとんどこうした画像資料に接することができない点、公刊資料の中で最も有用な展覧会の図録を収集している公的研究機関が少ない点、戦前・戦中の出版物にしか見出されず、戦後行方不明になってしまった図がある点、資料批判が不可欠である点(漂流記に添付された図の多くは漂流民が描いたものではなく、そうした絵や「横浜浮世絵」中には絵師が既存の絵図に基づいて描いた図がある、など)根付・絵皿など予想外の画像資料がある点、これらの画像資料を公刊もしくはインターネット上で公開しようと思う場合、著作権問題が生じる点、などである。

こうした点を考慮して、当面は、取りあえずは画像資料を数多く収集し、楽器別・ジャンル別に分類整理しながら資料批判を進め、長崎版画・横浜浮世絵など資料集成分が比較的まとまっている分野から画像集成を開始してはどうかと思う。

(コメント)

シンポジウム後半のディスカッションでは、秋岡陽氏の明快な司会のもとで活発な議論が展開され、音楽画像学の方法論に対する多くの疑問が提示された。議論の中心となったのは、画像学資料の信憑性・史料価値をどのように判断するか、その方法論上の手続きと論証法の問題であった。描かれた楽器の種類を、何を根拠に確定するのか、模写や下絵の技法が関わってくる資料間の影響関係をどう捉えるか、記録類その他の文献史料との比較検討の必要性など、さまざまな問題点が挙げられた。また、京都市立芸術大学の日本伝統音楽研究センターが立ち上げようとしている日本音楽画像学研究プロジェクトが紹介され、その関連で画像学資料データベースにおける画像処理や著作権といった技術的・実際的な問題も話し合われた。

笠原潔氏による報告の中で、取り上げた資料の一部について「音楽史を語る資料として使えない」といった発言があったが、筆者の考えでは、然るべく資料批判のプロセスを経て、結果としてある資料が「史実」を語って

いないことが判明しても、その資料を、誰が、何の目的で、誰に依頼されて作ったのかなど、その背景を検討することで、逆に音楽に対する当時の考え方のさまざまな側面が見えてくるのではないかと思われる。そしてそれも音楽史における重要な証言となるのではないだろうか。
(スティーヴン・G・ネルソン)

第440回東洋音楽学会定例研究会(2001年6月2日)
東京芸術大学音楽学部5-301教室

研究発表

伊澤修二の鼓手体験と西洋音楽受容

幕末の軍制改革と蘭式太鼓について

奥中康人(日本学術振興会特別研究員・東京大学)

(発表要旨)

幕末の軍制改革によって西洋式軍隊が導入されたが、その際どのような要請から西洋の太鼓が用いられることになったのか、その役割を概観し、また(同時代に太鼓を叩いていたといわれている)伊澤修二にとっての鼓手体験の意味を考察した。

幕末軍制改革は、ハードウェアとしての最新式西洋銃の採用と、それに伴うソフトウェア(用兵・戦術)の革新として特徴づけることができる。新しい集団戦術を遂行するには、大量に必要とされた歩兵銃卒を事前に十分トレーニングしておかなければならなかった。訓練(ドリル)を効率よくおこなうために採用されたのが西洋の太鼓であり、歴史的には安政年間、長崎においてオランダ人から学んだ太鼓を嚆矢とする。

演奏されていたのは足並みを揃えるための「マルス」や集団秩序にかかわる合図・号令であり、ドラムの楽譜(鼓譜)や現在も傳承されている山国隊(京都府)の演奏等を分析すると、その奏法は「二つ打ち」に基づいたRudiments(スネアドラムの基礎メソッドで、Five Stroke Roll, Nine Stroke Roll, Flam等)に他ならないことが明らかになった。

高遠町図書館(長野県)の藩史料等によって幕末高遠藩の軍制改革を調査すると、高遠藩は安政四年以来オランダ式の軍制を採用しており、伊澤修二(八弥)ら十数名の少年は慶応年間に砲術家・江川太郎左衛門系のドラマーからオランダ式太鼓を学び、Rudimentsをマスターしたであろうと思われる。

ドラムに伴奏された西洋式ドリルは、日本人の「身体の改造」(近代化)を意味し、同時に武士や領民を隔てず取り込んだ点で封建的身分制度崩壊のさきがけともなったことから、伊澤にとっては「国民教育」の原点となったであろうこと(もちろん後の唱歌にかかわる業績と無関係ではなく、近代国家形成期の教育課題とも共通している)また文明化の装置として機能する極めて実用的な(芸術音楽とは異なる)「西洋音楽」の在り方を指摘した。

(質疑応答・コメント)

(永原恵三)高遠藩など小藩に西洋音楽が入ってゆくことは全国各地にも入っていったのであろうが、その流通を。

(答)太鼓に関して言えば、長崎海軍伝習所に入ってきたのがひとつ。そこで学んだ人が各藩へ。主な人は江戸に戻って他藩で新しい兵制を学んできた人に教え、それがさらに各藩にというのがメインと考える。高遠藩の場合は江川家を通して長崎経由のものが流れたと思う。

(塚原)江川家とは。誰が海軍伝習所に参加していたか。
(答)代官。人脈の流れは確認できる。

(永原)小藩の参加が特殊なものではなく一般的と考えた方がいいか。

(答)そう思う。

(柘植元一:感想)ドラムはまさしく西洋音楽の導入であるので、民俗音楽的にとらえるというのではなく音楽がいろいろな側面をもっていると考えた方が分かりやすいと思う。

(コメント)軍制改革という軍事的側面からドラムの役割と教習法を中心に発表された。高遠藩の例を通して鼓隊・鼓笛隊の各地への普及が予測できる。その点からも今後各藩の事例により幕末のドラム導入と伝習の具体的な状況が全国的にさらに明らかにされるであろう。

(大貫紀子)

研究発表

平家琵琶の調弦法について

薦田治子(お茶の水女子大学)

(発表要旨)

本発表では平家琵琶の調弦法をサワリとの関連で解明することを試みる。

平家琵琶は、4本ある弦の第 弦(以下ローマ数字は弦名)、 を三味線の二上りに調弦するが、 については、 の長3度上に調弦する傳承者と、短3度上に調弦する傳承者がある。前者は名古屋の当道の系譜を引く傳承者、後者は津軽の晴眼愛好家の系譜を引く傳承者である。

どちらの傳承も、 の音高は時によって高低があって不安定である。江戸時代の平家の伝書類は、 と の音程を長3度にするもの、短3度にするもの、完全4度にするものの三種がある。これら伝書に記された調弦法は、雅楽の黄鐘調との関連を思わせるが、どれも は開放弦ではなく、押弦で音高を聞いて調弦するよう指示しており、この調弦の手順は現行の傳承にも受け継がれている。

ところで、名古屋の当道系の傳承では第1柱をサワリ柱として用い、演奏のたびにサワリの付く位置を探って糊で固定する。この柱は山型をしていて、山頂で につかえており、稜線で、 にサワリを与えている。したがって、実際には、 には開放弦音がない。これが、 の音高が不安定になり、 を押弦音で調弦する理由である。

平家琵琶の柱は、『柱経』(17世紀末?)のような古い伝書では、楽琵琶と同様、半音間隔で4柱が並び、第4柱から覆手よりに全音間隔で第5柱が置かれる。『柱経』では の音程は短3度とされるが、 は開放弦の全音上の位置で につかえているので、実際に鳴るのは完全4度である。

名古屋当道系の現行傳承では、第1柱は乗弦(上駒)の際に置かれる。サワリを調整しやすくするために、『柱経』以後、次第に第1柱が移動し、それにつれて、 の非押弦音の音高も変化し、その結果、長3度型が生まれたものと考えられる。

(質疑応答・コメント)

(須田誠舟)鳥口のところでサワリの操作はできると思うが。

(答) 『柱経』では第一柱の記述でサワリの事が出てくるので鳥口でサワリをつけることはない。

(塚原) サワリが晴眼者に伝承されなかったわけは。

(答) サワリ柱をつけることはたいへんむずかしく、時間もかかる。晴眼者の稽古は師につれて一曲語ればあがり、たくさん数をあげる場合にはいちいちサワリをつけることまでは教えられなかったのではないか。

(金田一春彦先生が出席され、発表者へ励ましのお言葉があった。)

(コメント) 調弦と柱の位置の変遷に関しては先行研究があるが、特にサワリ柱との関係から考察され、発表では実音と録音資料で実証的に明らかにされた。サワリ(柱)の有無、三味線のサワリとの前後関係からサワリ柱の発生などについての追究が期待される。なお本発表は同題名の論文(『お茶の水音楽論集第3号』)に基づいており、論文(実費)の希望者は発表者まで申し込まれたい。(大貫紀子)

第 441 回東洋音楽学会定例研究会(2001 年 7 月 7 日)
上野学園日本音楽資料室

研究発表

催馬楽の音楽的特徴 律と呂の比較をめぐって

李知宣(お茶の水女子大学大学院助手)

(発表要旨)

平安歌謡である催馬楽は、十五世紀末に演奏伝承が絶たれ、江戸時代に復元されて現在に至る。現行の催馬楽は律と呂の音階の区分がなくなり、また五拍子曲は一定の周期性がなく、疑問点の多い現行曲は再検討が要される。そこで、本研究では、十五世紀以前の楽譜史料を中心に催馬楽を分析し、復元前の催馬楽の音楽的特徴を明らかにした。

第一に、『三五要録』と『仁智要録』を五線譜に訳し、旋律を分析した結果、律の音階は唐代の「羽調」から、呂の音階は「宮調」からなっていること、音の進行傾向から見て、律は「六音音階」を、呂は「七音音階」を用いていること、律と呂は相違している音の機能があることが明らかになった。

第二に、『催馬楽略譜』の八カセの連結を統計的に分析した結果、律の八カセの連結は極めて限定されているのに対して、呂の連結は極めて多様であることが分かった。それから、『催馬楽略譜』を五線譜に訳し、旋律を分析した結果、律は「五音音階」を、呂は「六音音階」を用いていること、律と呂は相違している音の機能があること、律呂の大きな相違点は、律では「律角(宮から完全四度)」を、呂では「呂角(宮から長三度)」を用いることであることが明らかになった。

第三に、『三五要録』『仁智要録』と『催馬楽略譜』との比較を行い、両者は異なる音階を用いていること、

「装飾の付く音」が相違していること、楽曲を構成する旋律法が異なっていることが分かった。要するに、『三五要録』と『仁智要録』の催馬楽は音階や装飾の使い方が唐楽と類似しており、一方で、『催馬楽略譜』の音階や装飾の使い方に見られる特徴は、声明をはじめ、平安から鎌倉時代にかけての日本の歌謡に見られる特徴と共通し、この間に、催馬楽の音楽が実に著しく日本化したことが指摘できる。

以上の考察から、復元前の催馬楽は現行の催馬楽とは

異なって、律と呂が音階、音の機能、旋律構造などで相違し、それぞれの特徴をもって催馬楽を構成していることが明らかになった。

研究発表

楽琵琶の左手の技法と調子の連関

- 『三五要録』の分析による -

遠藤徹(東京学芸大学)

(発表要旨)

本発表は、楽琵琶の左手の技法の一である「叩」の活用例を、平安末期に藤原師長によって撰述された『三五要録』から総合的に抽出した結果浮かび上がってきた諸問題を報告したものである。「叩」は『博雅笛譜』など平安期の唐楽の基幹をなす笛譜における「由」の箇所にも適用されている装飾法で、原調(唐代中国の調)とのあいだに一定の連関が認められることから、「叩」の用例を詳細に検討することによって、日本の調子に再編分類されている各々の曲と原調との対応関係、原調自体の構造、日本における伝承過程でおきた変容の実態などについてかなり明快な楽理的説明が可能となる。

分析によって浮かび上がってきた数々の問題のなかから本発表では以下の点について詳述した。(一)壹越調の楽曲にはA B Cの三類の傾向がみられ、Aは商調を原調とするが、「叩」の活用部分で音律が変化し音階上は宮調化していること、Bは商調を基本とするが部分的に宮調への転調が確認されること、Cは宮調の五声を基調とし、「叩」の技法の活用が僅少であること。(二)沙陀調にもA B二類の傾向がみられ、Aは宮調を原調とし明らかに壹越調とは異なる傾向が認められること、しかしBでは壹越調Aとのあいだに楽理的な相違は認められないこと。

(三)黄鐘調にもA B Cの三類の傾向がみられ、Aは羽調を原調とする本来の黄鐘調であるがBは終止音が平調であり原調は角調と判断されること(ただし「叩」の傾向はAと異ならず、この点が黄鐘調に編入されることになった主要因と考えられる)Cは商調を原調とすると考えられること。(四)水調もA B二類の傾向がみられ、Aは商調を原調とするが壹越調Aと同様に「叩」の活用部分で音律が変化し音階上は徵調ないしは宮調化していること、水調Bは黄鐘調と同じく羽調を原調とするが、「叩」の活用部分でやはり音律が変化し、音階上徵調化していること、などである。

コメント

研究発表二本はともに雅楽古楽譜を対象とし、詳細で統計的な楽譜分析に基づいて、従来の音階論に対し新たな見解を示すものであった。

李知宣氏は、平成13年3月に学位を取得した博士論文の一部を発表した。江戸期復興以前の催馬楽譜を五線譜化した上で、楽曲構成音の出現頻度を統計し、呂律の音進行の特色を明らかにしている。フロアより、音階論の論拠となる宮商角徵羽の音高を如何様に決定したのか、付物楽器と声にずれのあった可能性はないか、といった問いや、同時代の関連資料として、金沢文庫蔵「西方楽」に関する意見が出された。

遠藤徹氏は、林謙三「博雅笛譜考」を研究の出発点とし、琵琶の「叩」の技法の出現数から各調子の音階構成音の特色を類型化し、中国における原調の推定と日本に

おける音階の変容の考察に及んでいる。質疑では、平安の音楽家による琵琶の手付けの変革にも拘らず、「叩」は元の音階と同位置に出現している点が重要であるということ、また原調からの変容に伴い、管楽器と音階構成音にずれが生じるが、これは音階の差というよりむしろ装飾と捉えられたのではないか、等の意見があった。

(近藤静乃)

会員異動

住所・所属等に変更がありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファックス、E-mail等でも結構です)

改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨明記してください。

図書・資料等の受贈

(2001年4月～2001年7月、到着順)

- 『アイヌ民族文化研究センターだより』No.14
北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 『久保寺逸彦文庫 文書・写真資料目録』
北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 『研究紀要』第7号
北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 『浜松市楽器博物館だより』No.23,24 浜松市楽器博物館
- 『楽器誕生！～日本の音の知恵と技～』特別展図録
浜松市楽器博物館
- 『祈りと踊りの楽器たち』特別展図録
浜松市楽器博物館
- 『フィールドワーク報告書(パプアニューギニア・セピック川中流域の楽器)』vol.3 浜松市楽器博物館
- 『平成12年度浜松市楽器博物館年報』浜松市楽器博物館
- 『音楽学』第46巻2,3号 日本音楽学会
- 『日本音楽学会会報』第51,52号 日本音楽学会
- 『日本音楽学会関東支部通信』第56号 日本音楽学会
- 『正派初代家元 中島雅楽之都先生の足跡』正派邦楽会
- 『楽道』4,5,6,7月号 正派邦楽会
- 『白い国の詩』4,5,6,7月号 東北電力(株)地域交流部

- 『月刊みんぱく』4,5,6,7月号 国立民族学博物館
- 『能楽資料センター紀要』No.12
武蔵野女子大学能楽資料センター
- 『MLAJ Newsletter』vol.21 No.4 音楽図書館協議会
- 『地域研ニュース』No.12
国立民族学博物館地域研究企画交流センター
- 『アジアセンターニュース』No.17
国際交流基金アジアセンター
- 『年報 音楽研究』第17巻
大阪音楽大学音楽研究所・楽器博物館
- 『演劇映像』第42号 早稲田大学演劇映像学会

新刊書籍

- 『戦争歌が映す近代』堀雅昭著、葺書房、¥2,800
- 『和泉流宗家として 伝統と革新、狂言和泉流という流儀』和泉元弥著、ベストセラーズ、¥680
- 『絵本夢の江戸歌舞伎』服部幸雄文・一ノ関圭絵、岩波書店、¥2,600
- 『金沢能楽会百年の歩み 上』金沢能楽会設立百周年記念事業実行委員会編、金沢能楽会
- 『歌舞伎』河竹登志夫著、東京大学出版会、¥2,800
- 『歌舞伎の根元』今尾哲也著、勉誠出版、¥8,000
- 『岐阜県の祭りから 3』清水昭男著、一つ葉文庫、¥1,450
- 『芸能伝承の民俗誌的研究 カタとココロを伝えるくふう』上野誠著、世界思想社、¥4,500
- 『芸能の表現 説話とのかかわり』馬淵和夫責任編集、笠間書院、¥6,500
- 『現代能楽師論』長尾一雄著、能楽書林、¥2,000
- 『今宵も歌舞伎へまいります』沼野正子著、晶文社、¥1,900
- 『祭祀と国家の歴史学』岡田精司編、塙書房、¥7,500
- 『庶民芸能と仏教』関山和夫著、大蔵出版、¥2,300
- 『新版歌祭文・摂州合邦辻・ひらかな盛衰記』織田紘二編著、白水社、¥3,600(歌舞伎オン・ステージ15)
- 『地歌舞伎に生きる 中村津多七・高女夫婦振り付け師』日比野光敏編著、岐阜新聞情報センター、¥2,381
- 『説話と音楽伝承』磯水絵著、和泉書院、¥15,000(研究叢書259)
- 『新能』伊藤喜一郎撮影、中村稔編、おうばの里の会
- 『中近世声調史の研究』坂本清恵著、笠間書院、¥16,000(笠間叢書332)
- 『東京の祭り暦』原義郎著、小学館、¥1,700(Shotor travel)
- 『日本音楽のち・か・ら 次世代に伝えたい古くて新しい音の世界』現代邦楽研究所編、西潟昭子監修、音楽之友社、¥2,400
- 『能楽鑑賞百一番』金子直樹文、淡交社、¥2,300
- 『能がわかる100のキーワード』津村禮次郎著、小学館、¥1,600
- 『八世竹本綱大夫三十三回忌 偲ぶ草』出版文化社
- 『備後神楽』田中重雄著(上下町)八幡神社、¥2,000
- 『吹上町神社と祭礼』吹上町コスモス大学第11期生編、吹上町コスモス大学第11期生
- 『本海番楽 鳥海山麓に伝わる修験の舞』鳥海町教育委員会編、鳥海町教育委員会

新発売視聴覚資料

コンパクト・ディスク

『全集日本吹込み事始』東芝 E M I TOCF-59061 ~ 71、
¥21,000

前号の訂正とお詫び

前号 9 頁の左列 10 行目「問：北岡朱美」を、「問：北岡朱実」に訂正してください。心より、お詫び申し上げます。

編集後記

新メンバーによる会報編集は本号で 3 号目を迎えました。大会・例会案内、例会報告、会員異動、新刊書籍、新発売視聴覚資料など、多彩な内容を、年間 3 号で、どのようにお知らせするか、試行錯誤をしながらの編集です。ご意見やご提案がありましたら、どうぞお寄せください。

本号には、沖縄の大会に関する日程と出欠葉書が同封されています。大会プログラムについては、10 月はじめに、別途お送りいたします。

次号は 1 月 10 日の発行予定です。

会報編集委員会

理事：加藤富美子、野川美穂子

参事：太田暁子、小塩さとみ、小野美紀子、北岡朱実、
高瀬澄子、竹内有一、福田千絵、前島美保、前原
恵美、増野亜子、松村智郁子、三上康子